



今日の中国において、「正論」とはなにか。これはなかなか難しい問題である。林彪異変を経た今日の中国では、一時期のような「毛沢東思想」への狂信的な崇拜と絶対化の傾向は、相対的低下の方向にあるが、しかし「毛沢東思想」があらゆる価値基準になっていることに変わりはない。そのような体制化した公認イデオロギーへの忠誠が至上命令として要請される社会であるかぎり、中国の立場からする「正論」は、「毛沢東思想」以外にはあり得ないであろう。

よってソ連社会の恥部をさらけだした今日のソ連とも決定的に異なるところである。ソルジェニーツインはソ連において、あのような処遇に会いながらも、西側記者のまてで、自己の見解を表明することができたし、サハロフ博士のような個性も、また、「時事問題の記録」のような反体制派の新聞も、依然として今日のソ連には存在する。だが、中国においては、そのような反体制知識人の存立状況そのものが抹殺されざるを得ないのである。

それでは、そのような中国において、毛沢東体制への批判と抵抗がなかったかという、周知のように、毛沢東体制への批判と抵抗の連続の過程こそ、現代中国の政治過程でもあった。それだけに、中国の指導者は、今日、「社会主義社会での喰うか喰われるかの階級闘争」をつねに強調しているのである。

中国に見る反体制の“波”

〈上〉

批林批孔、ベートーベン批判、そして映画「中国」にまで及ぶ第二の「文化革命」は、いま中国の全土をおおっているが、その中に見逃せぬ過去からの「正論」を発掘してみた。

新連載
海外「正論」



中嶋嶺雄 (外語大助教授)

針にたいし党内から真正面にその非を諫めようとしたのが彭德懷（国防部長）らであった。こうして、廬山會議こそ「一大階級決戦」の場だとされているが、党中央は實際上、彭德懷らの意見を受け入れて路線を修正し、毛沢東はまもなく國家主席を辞任して、文化大革命の時期まで「第二線」に引き下がったが、政治的には彭德懷らは激しく断罪されて失脚させられたのである。彭德懷は廬山會議で「毛主席の故郷のあの人民公社が報告した去年の増産額は、実際にはそんなに多くありません」等々の事実と言及し、「穀物は地に散らばり、イモの葉は枯れ、若者は鉄をつくりに行っていて、女子供がとり入れをしている。来年はどうやって過ごすのだろうか。どうか人民のことを考えてほしい」との風刺の詩をものしたのち、自己の責任において五九年七月十四日付で毛沢東への「意見書」をまとめたが、このことが毛沢東の激しい反発を招いたことはいうまでもない。当時は毛沢東も必死であり、廬山會議では「中国人民解放軍が彭德懷についてゆくならば、私はゲリラを戦わなければならないだろう」とまで語ったのである。結局、彭德懷は廬山會議の席上でも自己批判を迫られ、同年九月九日付で

毛沢東宛書簡を書いて、労働人民の集團生活のなかで学習と思想改造をおこなうことを誓わざるを得なかったが、しかし、彭德懷への糾弾はさらに激しくなるばかりであった。やがて、文化大革命の時期に監禁されたまま罰問を受けたときの記録を見ると、彼は、基本的にはついに批判に屈せず、「私は半分正しく、半分間違っている。誤りも犯したが功績もある」と述べ、「廬山會議ののち、海瑞（文化大革命で問題になった明朝の清官・海瑞。彼は清官ゆえに帝の横暴を諫めて免官された——引用者）」としての私の役割もまた終わった」と痛烈に最後の言葉を発したのであった。いうまでもなくこのような「正論」こそ、「反党・反社会主義、反毛沢東思想」として葬られていったのであり、彭德懷がその後のような運命をたどったのか、いまやその生死も明らかではない。彭德懷は、その「意見書」のなかで、きわめて慎重に毛沢東への敬顧の念を示しつつも、問題点についてはきわめて大胆に、こう述べている。

「大げさに誇張する風潮がかなり普遍的にはびこり、去年の北戴河會議のときに、食糧生産額を大きく見積もったりして、いつもの現象をつくってしまいました。誰も

が食糧問題はすでに解決されたと思い、そのために人力を工業に投入させることができる、と感じてしまいました。……要するに、实事求是にもとる欠陥を犯してしまつたのです。大げさに誇張する風潮が各地区、各部門に吹きまくり、そのような信じがたい奇蹟が新聞報道にも現われて、確實に党の威信に重大な損害をこうむられました。……小ブルジョアの熱狂性は、われわれが「左」の誤りを犯すのを容易にしました。一九五八年の大躍進で私と他の少なからぬ同志は同じように大躍進の成果と大衆運動の情熱にまどわされ、ある種の左傾的傾向を相当程度発展させ、いっきょに共產主義に飛躍しようと考えました。思想が一度に優位を占め、党が長期にわたって形成してきた大衆路線と实事求是の作風をないがしろにしてしまいました」（彭德懷「意見書」、一九五九年七月十四日。丁望主編『中共文化大革命資料彙編（三）』、明報月刊社、一九六九年、所収、傍点引用者）。

こうして中国では、すべての「正論」が封ぜられ、まもなく三年連続の経済的困難ののちに、やがて六〇年代前半の経済調整期から後半の文化大革命へと歩んでいったのであった。

級闘争」観の変遷を見なければならぬ。
そこで、一九五六年に「スターリン批判」に
関連して中国共産党が発表した歴史的文書
「再びプロレタリアート独裁の歴史的経験
について」を振り返ってみよう。そこには次
のような注目すべき指摘があるのである。

「搾取階級がすでに消滅され、反革命分子
がすでに基本的に粛清されてからも、国内
の反革命的残存分子（このような残存分子は
帝國主義が存在するあいだは完全に粛清するこ
とは不可能である）にたいするプロレタリア
ート独裁は依然として必要であったが、し
かし、その主要な鋒先は国外の帝國主義侵
略勢力にたいする防禦に向けられるべきで
あった。このような条件のもとでは、もち
ろん国内の政治生活において、各種の民主
的な諸秩序をだんだんと発展させ、健全に

し、また社会主義の法律制度を健全にし
て、国家機関にたいする人民の監督を強
め、国家の管理と企業の管理の活動におけ
る民主的な方法を発展させ、国家機関や企
業の管理機関と広範な大衆との結びつきを
緊密にし、こうした結びつきをそこなうよ
うな障害を除去し、官僚主義の傾向をさら
に一步すすんで克服すべきであって、スタ
ーリンのように、階級がなくなつてからも
依然として階級闘争の尖鋭化を強調して、
社会主義的民主主義の健全な発展をさまた
げるようなことはすべきではなかった。ソ
連共産党が断固としてこの問題でのスタ
ーリンの誤りを正したのはまったく正しかつ
た」（中国共産党「再びプロレタリアート独裁
の歴史的経験について」『人民日報』一九五六年
十二月二十九日、傍点引用者）

4 「大躍進」政策を諫 めた彭徳懷の痛憤

一九五七年の転換以後、中国は毛沢東の
社会主義観に基づいて、急激な社会主義建
設に乗り出し、五八年には、「三面紅旗」の
政策で知られる「大躍進」政策へと邁進して
いった。人民公社化運動と並行しておこな
われたこの生産躍進運動は、大衆の主観的
能动性を最大限に喚起し、鳴り物入りで大
衆動員をはかったものであったが、そのよ
うな無理は、またたくまに中国農村経済に
破局をもたらし、水増しされた生産実績や
土法高炉運動の弊害も相次いで、党中央は
ついに五九年夏の八期八中全会（廬山会議）
で「大躍進」政策の實質的修正をおこなわ
ざるを得なかった。このような毛沢東の方

あなたはどうな方法で株式投資をおやりですか！

カンそれとも証券マンにお任せきりですか。

当研究所は、誰れもが知らない法則を長い年月
を経て、四年前に完成したものです。

株には二ツのフシがあり、その見極めによつて
上昇したり、下落するという法則です。
あなたも、一度、当研究所にご相談下さい。

★株式投資のご相談は……

日本唯一の
戦法

中京経済研究所

〒460

名古屋市中区大須三三〇一二五

(大信ビル3F)

☎〇五二二四一一二二二九代

正論
資料
請求券

2 個人崇拜に挑戦した 鄧小平報告

右の陸定一演説は、その見事な論理にもかかわらず、いわば両刃の剣でもあった。

「人民内部」と「敵」とを区別する基準こそ「毛沢東思想」なのであるから、その基準の恣意性によって、陸定一自身がやがて「敵」として処断されたのであった。だが同時に、その頃は、社会主義社会に生ずる弊害を除去しようとする潮流が大きく動いていたことも事実であり、「スターリン批判」の問題を正面からとらえて、中国においてもタブーであった個人崇拜の問題に挑戦したのが鄧小平であった。鄧小平は、一九五六年九月の中国共産党八大大会における党規約改正報告でこの問題をとりあげ、「毛沢東思想」という言葉を党規約から削除することになったが、やがて文化大革命では、党内の資本主義の道を歩む第二の実権派として激しく批判され、「鄧小平は、全党・全人民の毛主席にたいする無限の熱愛、無限の尊敬と崇拜の心情に反対した」（鄧小平の十大罪状、『八・二五戦報』一九六七年二月十四日）として失墜していったのである。それだけに、一九七三年四月、鄧小

平が劇的な復権を遂げ、今日、再び中国政治の第一線に立ったことの意味は、将来的にもきわめて大きいといえよう。鄧小平はこう述べていた。

「党の民主主義的中央集権制のもう一つの基本的な問題は、各級の党組織における集団指導の問題であります。レーニン主義は、あらゆる重要な問題については、個人によらず、それ相応の集団によって決定することを党に要求しています。集団指導の原則を守りとおし、個人崇拜に反対することの重要な意義については、ソ連共産党第二十回大会が有力な説明をあたえていました。……いうまでもなく個人が重要な問題を決定することは、共産主義政党の党建設の原則にそむくものであり、必ず誤りを犯さないではすみません。……もちろん、個人崇拜は非常に長い歴史をもった社会現象であるため、こうしたものがわが党の生活や社会生活のなかにすくしも持ち込まれないというはずはありません。われわれの任務は、個人をかつぎあげたり個人の功績や徳性をむやみにほめたたたえたりすることに反対する中央の方針をひきつづきあくまで実行し、指導者と大衆のつながりを本当に固め、党の民主主義の原則と大衆路線を

あらゆる面で徹底的に実行してゆくことであります」（鄧小平「党規約改正についての報告」一九五六年九月十六日、傍点引用者）

3 社会主義社会における階級闘争への否定的見解こそ党中央の「正論」

周知のように、文化大革命から「批林批孔」運動に至る中国は、一貫して「社会主義社会における階級闘争」を強調している。先の中国共産党十大大会でも、この点は再三強調されたし、また、文化大革命の時期には、階級消滅論が一斉に非難されもした。だが、「スターリン批判」からハンガリー事件に至るソ連・東欧の動揺を目撃した頃の中国共産党指導者たちは、今日のようには「社会主義社会での階級闘争」を執拗に強調することがなかったばかりか、それを否定する見解に立脚していたのである。ひたすら「社会主義社会における階級闘争」を主張している今日の中国共産党を見れば、全く意外の感を与えられようが、この相違こそ、一九五七年以降の中国政治の転換を物語るものであり、内には「百花齊放・百家争鳴」運動の衝撃、外には中ソ対立の発生に直面した毛沢東政治における「階

ンはたしかに地下水のごとく流れてはきたが、今日の政治体制のもとで、そのようなオビニオンは、ことごとく摘みとられてしまふのであるから、たとえ時流に抗しても「動じない」とはいいたい。だが、そこまで厳密に「正論」を定義つけて中国の状況を考えることは、そもそも不可能でもあるので、ここでは毛沢東体制下における特筆すべき異論を「正論」と考え、従来、あまり紹介されることのなかったそれらの「正論」を年代誌的に紹介してゆくことにする。

1 百花斉放・百家争鳴と陸定一演説

中国革命に成功し、社会主義建設へと前進した中国にとって、一九五六年二月のソ連共産党第二十回大会における「スターリン批判」は、大きな衝撃をもたらした。革命の過程では、スターリンの弊害を独自の政治指導方式によって克服してきた中国共産党ではあったが、ここではじめて社会主義社会における「民主主義と自由」の問題に直面したのである。そのようなとき、當時は、毛沢東自身も社会主義社会における矛盾の存在とその解決の方法を「人民内部

における民主主義と自由」の拡大の方向で考え、一旦は「百花斉放・百家争鳴」のローガンを打ち出したのであったが、共産党批判さえ許容しようとした「百花斉放・百家争鳴」の大衆運動が激しい党批判の洪水となったとき、党中央は一九五七年後半から一切の批判を封ずる反右派闘争へと転換していった。この転換こそ、現代中国の内政における決定的な旋回点であったが、しかし、はやくも五六年五月に党中央宣傳部長・陸定一がおこなった「百花斉放・百家争鳴」の呼びかけは、まさに中国における「正論」として記憶されねばならない内容を含んでいる。陸定一は文化大革命の初期に、毛沢東体制への反逆を試みた党北京市委員会の黒幕として彭真、羅瑞卿、楊尚昆とともに「四家店」のレッテルを貼られ、紅衛兵に街頭をひき回されたその姿が記憶に残っているが、右の陸定一演説の格調はきわめて高いものであった。陸定一はこう述べたのである。

「私たちが主張するところの『百花斉放・百家争鳴』の政策は、文学・芸術活動と科学研究活動の分野において、自分の頭で物を考える自由、弁論の自由、創作と批判の自由、自分の意見を発表し、自分の意見を

固持し、自分の意見を保留する自由をもつことを提唱するものであります。……私たちは反革命分子には自由をあたえないことを主張するものであります。反革命分子にたいしては、必ず独裁をおこなうべきことを主張します。けれども人民内部には、必ず民主主義と自由がなければならぬことを主張するのであります。これは政治的境界線であります。敵と味方は政治的にはつきり区別する必要があります。

私たちの主張する『百花斉放・百家争鳴』は、人民内部の自由であります。私たちは人民の政權が強固になるにしたがつて、こうした自由を拡大してゆくことを主張するものであります。……人民のなかに存在する観念論的な、落伍的な思想にたいして闘争をおこなうべきであり、この闘争もまた先鋭的な闘争ではありますが、……思想問題を行政命令式の方法で解決しようとしても効果はありません。公開的な論争を通じてのみ、唯物論の思想は一步一步観念論の思想を克服してゆくことができるのであります（陸定一「百花斉放・百家争鳴」、『人民日報』一九五六年六月十三日、傍点引用者）。